

誰かに、似てる

クラウン

誰かに、似てる

「困ったなあ」

彼は薄灰色の目を瞬かせて言った。

この人と私は知り合いらしい。なぜ『らしい』かということ、私が記憶喪失だから。

「ごめん恵、ちょっと待ってて」

携帯が鳴り、彼は部屋を出た。私はテレビをつける。ドラマだ。チャンネルを流し、ニュースで止めた。

『——湖畔で女性の他殺体が発見されました。年齢は——』

思わず見入る。

誘拐されて殺された女性。輪郭が自分と重なり、無性に不安になった。

本当に彼は知り合いなのだろうか。私は誘拐されて、頭を殴られ記憶を失っているのではないか。記憶の糸は手繰れない。

一際強い頭痛と共にあの男の顔が思い浮かんだ。どこかで見た。

誰かに似てる。

テレビ。きっとニュースだ。あんな珍しい瞳の色だもの、既に指名手配されているに違いない。迷いが確信に変わる。

鼓動が徐々に駆け足になる。追われるように廊下に出た。誰もいない。

一室からぼそぼそと話し声が聞こえた。ひんやりとした木製の扉に耳をつける。

「あとは身代金を要求するだけさ。重石をつけて沈めちまえば証拠なんて上がらないからな」

心底楽しそうに語る声音。思わず息を詰めた。

心臓が痛いくらいに脈打っている。

このままでは殺される。

扉の向こうで電話を切る音。

はやる心を宥めつつ、忍び足で元の部屋に戻った。

視線を巡らすと、本棚には沢山の推理小説。

ようやく見つけた武器は、ガラス製の重厚な灰皿。拳銃どころか相手が素手でも真っ向からでは敵わないだろう。

継るように、冷たい凶器を両手で抱える。

硬質なノックの音が響いた。今しかない。

ドアの影に立ち、隙を突いて思い切り両手を振り下ろした。

酸欠で眩暈がする。

立っているのも危ういほど膝頭が笑っている。

フローリングの目地を伝うどす黒い血を追っていた視線を上げると、正面に鏡があった。

誰かに、似てる。

鏡の中の彼女は、薄灰色の目を見開き、喘ぐように息を吸う。

「いやああああ！！」

『昨夜未明、俳優の朝居幸生さんが、頭部を鈍器のようなもので殴られ、倒れているのが発見さ

れました。搬送先の病院で死亡が確認されています。同行していた妹の恵さんが現在行方不明で——』

『残念ですね。演技派の彼が、二時間ドラマで連続誘拐殺人犯という難しい役柄に挑戦すると聞いて——』

『続いてのニュースです。○○区××町で身元不明の女性の遺体が発見されました。高層ビルの屋上から飛び降りたと見られ——』